「遠くて近い信仰者」⑤モーセ　　**出エジプト 3:1～12**

モーセというと、皆さんは、どのような人物として思い描きますか。モーセはイスラエルの偉大な指導者でした。映画「十戒」などで見るような、人を近づけないような威厳に満ちた人物というイメージを持っている人が多いと思います。確かにモーセには、人間の威厳以上のもの、神の栄光の輝き、オーラがありました。出エジプト記 34 章には、神と語り終えて山から降りてきたモーセの顔から光が放っていたとあります。しかし、今日の聖書の場面のモーセは、ヒーローでも、指導者でもありません。ごく普通の羊飼いでした。しかも、この時のモーセは、エジプトで人をあやめて、ミデヤンの地に逃れてきた、逃亡者であったのです。つまり身を隠して生きていたのです。

さてモーセは百二十年の地上の生涯を過ごしましたがその生涯は四十年ごとに分けることができます。最初の四十年間、モーセはエジプトの宮廷で過ごしました。次の四十年間、モーセはミデヤンの地で過ごし、最後の四十年間は、イスラエルを導いて荒野で過ごしたのです。

創世記に記されていますようにかつてヨセフが王様に代わってエジプトを取り仕切っていた時、エジプトに移住したヤコブの一族は、ヨセフの保護のもとにエジプトで大きな民族になるのですが、エジプトの王朝が代わってからは、エジプトはイスラエル人を奴隷にしました。それはイスラエル人がついにはエジプトを乗っ取ってしまうのではないかと恐れたからです。しかもモーセが生まれた時には、イスラエル人が増え広がるのを恐れた王パロは、男の子が生まれたら、殺してしまうようにとの命令を出していたのです。モーセは、生まれてからしばらくは両親によって隠して育てられたのですが、隠し切れなくなった両親はモーセを籠に入れてナイル川に流しました。そして程なくモーセは王女に拾われ、エジプトの宮廷で王女の子として育てられることになりました。宮廷で育てられても、モーセは、やはりイスラエル人の子でした。時が過ぎて、ある時エジプト人がイスラエル人をひどく鞭で打っているのを見て、モーセは、心に憤りを覚え、ついにそのエジプト人を殺してしまったのです。モーセは、自分のしたことが誰にも分からないように、エジプト人の死体を砂に埋めたのですが、それは、一日のうちに人々に知られるようになっていました。この時すでに王女は亡くなっていたのでしょう、何の後ろ盾もないモーセは、このことが王パロの耳に入る前に、エジプトを脱出し、ミデヤンの地に逃れたのです。それは、モーセが四十歳の時で、それから四十年間、モーセはミデヤンの地で、羊飼いとして過ごしたのです。

最初の四十年、モーセはこの世の栄光の中にいました。最後の四十年、つまり八十歳から百二十歳までエジプトを出て荒野を旅する期間は、神の栄光の中にいました。しかし、ミデヤンの地での四十年はモーセにとっては苦労のない日々であったかもしれませんが、生きがいも、やりがいもない、まるで人生の谷間のような日々でした。これからをどう生きていくかという、人生の目的も、目標も、そしてそのための力も失った状態にあったのです。四十台と言えば人生の一番充実した時ですがそれを無気力かつ漫然と過ごしていたのです。私たちの人生は、年齢にかかわらずこの時のモーセのような時があるのではないでしょうか。もしそうなら、まず、すべきことは正直に、そのことを認めることではないでしょうか。そして、神に、「私を過去から救い出してください。この人生の谷間から、将来にむかって歩ませてください。」と求めたいと思うのです。神は、その求めにかならず答えてくださいます。神は、逃亡者モーセにも語りかけてくださったお方ですから、私たちの求めに答えてくださらないわけはないのです。

では、神はどのようにモーセを過去から将来へ、無為な日々から神からの使命を果たす日々へと招き入れてくださったのでしょうか。それを見たいと思います。まず、神はモーセに、燃える柴を見せました。中東のこの地方では、乾季になると、あちらこちらに枯れた柴、灌木が点在するようになります。熱気のためにそれに火がついて燃えることがあるのです。しかし、枯れた柴は、岩山のあちらこちらに点在しているので、ひとつが燃えても、他に燃え広がることがなく、すぐに消えていきます。モーセは羊を追って、

野や山を歩き回っていましたから、枯れた柴が燃える光景は、幾度となく見ていたことでしょう。ところが、今回は、いつもと様子が違うのです。何時間たっても、柴は燃え尽きないで、赤々と燃えつづけていたのです。モーセは、「なぜ、柴が燃えていかないのか、焼け尽かないのか」と、その柴のほうに引かれていきました。モーセは、好奇心から不思議な光景に引かれて行きましたが、それによって神に出会うことになりました。決して燃え尽きることのない柴は、神の無限の力を表わしていました。生きるほんとうの力を失っていたモーセは、知らず知らずのうちに、そのような神の力に引かれていったのです。

次に神は、その燃える柴からモーセを呼ばれました。モーセが「主よ」と神を呼んだのではなく、神がモーセを呼ばれたのです。モーセは、この時、神をどう呼んでよいのかも知りませんでした。モーセは「私が彼らに『あなたがたの父祖の神が、私をあなたがたのもとに遣わされました。』と言えば、彼らは、『その名は何ですか。』と私に聞くでしょう。私は、何と答えたらよいのでしょうか。」出エジプト 3:13 と、神に尋ねています。これはこの時、まだ彼は、神を「主」（ヤーウェ）と呼ぶことを知らなかったということです。モーセが神を呼び求める前に、神のほうからモーセに呼びかけられました。神が、まず、私たちに呼びかけておられる姿は、聖書のいたるところに見ることができます。あのアダムとエバが罪を犯して、神の顔をさけて隠れた時も、神の方から「あなたは、どこにいるのか」創世記 3:9 と呼びかけられました。神は、モーセに「モーセ、モーセ」と、その名を呼んで呼びかけられたように、私たちにも、その名を呼んで呼びかけられます。主イエスがエリコの町に行った時、イエスは、その町のザアカイに、その名前で呼んで「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」ルカ 19:5 と言われました。ザアカイが主イエスを知る前に、主イエスはザアカイを知っておられたのです。イエスは「(羊の牧者)は自分の羊をその名で呼んで連れ出します。」ヨハネ 10:3 と言いました。私たちのほんとうの羊飼いであるイエスは、何十億という人がいても、そのひとりびとりの名を知って、その名で呼んでくださるのです。モーセが神の名をまだ知らなかった時も、神はモーセの名を知り、彼をすみからすみまで良く知っておられたのです。モーセはエジプト人から忘れられ、イスラエル人から見捨てられていました。しかし、神は決してモーセを忘れず、見捨ててはいなかったのです。

神は今も、同じように私たちの名を呼び、私たちが応答するのを待っていてくださいます。私たちが、「神さま」、「天の父よ」、あるいは「主よ」と呼びかけることができるのもまた、「求めなさい」、「祈りなさい」、「わたしの名を呼びなさい」と、まず神が語りかけ、呼びかけていてくださるからなのです。「天の父なる神様」と言ってから神様が出てくると言おうか応答されるのではありません。ちょうどラジオやテレビの電波のようですね。常にあらゆる電波は流れています。私たちがその電波に合わせれば聞こえてくるのです。モーセは、神の呼びかけに「はい、ここにおります」と答え、そこから神との対話が始まりました。そのように、私たちも、モーセのように「はい。ここにおります」「はい。何でしょうか」と答えていきましょう。その時、明日に向かって生きる使命と力を、神からいただくことができるのです。

それから、神はモーセに「足のくつを脱げ」と命じられました。「くつを脱ぐ」という行為には、権利を放棄するという意味があります。こちらの理屈ではありません。モーセは、神からの召命を受ける時、自分の権利を主張せず、無条件でそれを受け入れるよう、求められたのです。そして神は、「わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」と言われました。神は、もちろん、全世界の主であり、すべての人の神です。しかし、ここで、「アブラハム、イサク、ヤコブの神」と言われたのは、多くの民族の中から、アブラハムとその子孫を選んで、ご自分の民とされた神が、どんなにか、ご自分の民を愛しておられるかを示すためでした。神は、主権者として、モーセに、イスラエル人を救い出せと命じることもできたのですが、まず、エジプトで苦しんでいるイスラエル人にたいしてどのような思いを持っているか、その心のうちをモーセに明らかにしています。「わたしは、エジプトにいるわたし

の民の悩みを確かに見、追い使う者の前の彼らの叫びを聞いた。わたしは彼らの痛みを知っている。」出エジプト 3:7　主は、モーセに、神と同じ思いになって、イスラエルを救い出すために立ち上がるよう、求め、モーセに命じました。「今、行け。わたしはあなたをパロのもとに遣わそう。わたしの民イスラエル人をエジプトから連れ出せ。」3:10 これに対してモーセは「私はいったい何者なのでしょう。パロのもとに行ってイスラエル人をエジプトから連れ出さなければならないとは。」3:11 と答えています。「私はいったい何者なのでしょう」というのは、「私は何者でもありません。そんなだいそれたことはできません。」という意味にとれば、謙虚なことばに聞こえます。しかし、ここでは、モーセの冷たい心を表わしているように聞こえます。つまり「なぜ何者でもない私がそんなことをしなければならないのか」ということです。モーセは「私はいったい何者なのでしょう。」と言いましたが、モーセはイスラエル人なのです。エジプトで苦しんでいる人々と同じイスラエル人なのです。モーセはミデヤンの地で安楽な生活をしていますが、エジプトでは同じイスラエル人が苦しんでいるのです。しかも、モーセは、ほんとうはナイル川で死んでいたかもしれないのに、神の特別なとりはからいによって命を救われ、エジプトの宮廷で教育を与えられたのです。それは、今、神の使命を果たすための準備だったのです。神の心はその民イスラエルのために痛んでいるのに、モーセは、同胞のために心を痛めることなく、かつてエジプトで与えられた特別な恵みを忘れてしまい、自分が神の民であることも忘れかけていたのです。

私たちは、自分の安楽な立場に寄りかかろうとしやすい者たちです。そんな私たちに、神は、神のこころを知るように求めておられます。私たちが、快適な自分のはきものを脱いで、福音という靴を履き、神のあかしびととなるよう、願っておられるのです。

しかし、神がモーセに与えた使命は、何百万というイスラエルをエジプトから救い出すという、途方もないことでした。これは、モーセにとって「困難な仕事」という以上に「不可能な仕事」でした。しかし、神は、私たちにできないことを命じるお方ではありません。神はモーセに「わたしはあなたとともにいる」と約束してくださいました。全能の神がこのことをしてくださるのです。モーセは四十年前、イスラエル人を苦しめていたエジプト人を打ち殺しました。その時、彼は同胞のために、自分の力で何かが出来ると思っていたのでしょう。しかし、その思い上がりはまったく打ち砕かれて、この時のモーセは自分の力の無さをいやというほど感じていましたが、モーセはこの時から、全能の神が無力なものをも用いてくださるということを学びはじめたのです。ムーディは、モーセの生涯についてこう言っています。「最初の 40 年間、彼は自分が何者かであると思っていた。次の 40 年間、彼は自分が何者でもないことを学んだ。そして、残りの 40 年間、彼は神が何者でもないものを用いてくださることを見出していった。」その通りです。モーセは、神の前にくつを脱いで、自分の権利だけでなく、能力もすべて、神に任せていったのでした。

この後、モーセは、言い訳を繰り返し、エジプトに行くのをためらい、エジプトに行ってからも、神に対してつぶやいています。モーセは神の使命を果たすのに順調なスタートを切りませんでした。しかし、その後、彼は問題にぶつかるたびに神の前に出て祈っています。それは、この時、神の前に「くつを脱ぐ」という体験ができていたからです。彼は「くつを脱ぐ」という体験を繰り返して、神からの使命をまっとうすることができたのです。生まれつき信仰の勇者である人は誰もいません。信仰生活において完璧なスタートをきることのできた人は、おそらく誰もいないでしょう。だれもが失敗をします。しかし、失敗のあとに、再び神の声を聞き、それに答え、「くつを脱いで」そこから一歩を踏み出す者が、信仰の勇者になるのです。そういう人を神は用いようとされるのです。私たちも、くつを脱いだ時、つまり主イエスを信じ、洗礼を受けた時のこと、信仰の原点に立ち戻り、そこから次の一歩へと進んでゆきたいと願わされます。祈ります。